
ティマーズの日々

ミミ シ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティマーズの日々

【Nコード】

N0923X

【作者名】

ミミミ

【あらすじ】

デジモンティマーズの短編小説集です。
主に啓人中心に書いていきます。

くすぐり（前書き）

今さらながら10年くらい前のデジモンテイマーズにハマってしまいました。

実はあんまりデジモンには詳しくないんですが日常生活なら書いてみたいなと思って書き始めました！！

かなり自己満足でやっていますが良かったら読んでみてください♪♪

くすり

く5年2組教室く

「ハアく…」

放課後、ぼーつと窓の外を眺めながら薄い茶色髪的少年、松田啓人はため息をついていた。

すると…

ガラッ！！

「あれ？啓人じゃん！！」

「博和！！健太！！」

調子の良さそうな塩田博和とメガネをかけた北川健太が教室に入ってきた。

「啓人、お前また反省文書かされてるのか？」

「うん…」

「授業中に落書きなんかしてるからだぞ…!」

「そうだけど…」

「そういう博和たちはどうしたの?」

「俺は今日の抜き打ちテストがあまりに悪かったからって職員室に呼び出されたんだよ…!」

「僕は付き添いだけだね…!」

博和に続いて健太が言った。

「そうなんだ…」

「じゃあもう帰るの?」

「ああ。啓人はもう反省文書けたのか?」

「ううん。まだ。」

「あともうちよつとなんだけど…」

「じゃあ待っててやるよ…!」

「本当!? ありがとう…!」

「ん!？」

啓人、首のところに「ミ」ついてるぞ…!」

「えっ！？どこっ！？」

啓人は後ろを向いてゴミを取ろうとしたが見当たらない。

「俺が取ってやるよ！！」

博和の手がそつと啓人の首に触れると…

「くふふ…」

啓人の口から声が漏れた。

「啓人、どうしたんだよ？」

「いや…ちょっとね！！」

健太の問いかけに啓人は笑いながら答えた。

すると…

「はっはーん！！」

啓人、お前もしかしてくすぐったがりや？（ニヤツ）」

「えっ… なっ何言ってるの…！
そんなわけないじゃん…！」

博和の問いかけに啓人はあわてて答えた。

「ふーん…
じゃあこれでもそんなこと言えるか？」

「えっ…」

ガシッ…！

博和はそう言っていると啓人の脇腹をつかんだ。

「ちよっ… 何すんの…！」

「啓人がくすぐったがりじゃないのか確認しようと思って…！」

博和はニヤリと笑うとそのまま啓人の脇腹を揉みだした。

「くふふふ…」

啓人の口から声が漏れる。

「どうだ？啓人？」

「ふふふ…」

「やっやめてよ…博和！！」

「おっ！！」

これくらいなら我慢できるか！！
じゃあこれならどうだ？」

博和はそう言うとな度は5本の指で啓人の脇腹をくすぐり出した。

「アハハッ！！
くすぐったーい！！」

啓人はじたばたと暴れ一気に笑いだした。

「なんだ！！」

「やっぱりお前くすぐったがりじゃん！！」

「アハハッ！！
そっそっだよ！！」

僕はくすぐったがりなんだよー!!」

「何でウソついたんだ？」

博和のくすぐる手は止まらない…。

「ギャハハハッ!!」

だっだつてくすぐったがりだって言ったら博和、絶対何かすると思
って!!

アハハハッ!!」

「結局ウソについてもくすぐられてるけどな…」

健太は呆れながら言った。

「アハハハハハ!!」

もっもうやめてよー!!」

啓人は目に涙をためながら必死に博和のくすぐりから逃れようとす
るが、椅子の背もたれからくすぐられてるためうまく動けない。

「ウソついた罰だ!!」

それ、こちよこちよこちよこちよ…」

「ワハハハッ！！やめてよー！！」

「おい、博和。」

そろそろやめてやれよ。

啓人苦しそうだし…」

さすがに苦しそうに笑う啓人を見かねて健太が言った。

「何言つてんだよ健太！！」

苦しいわけないだろ！！

啓人こんなに嬉しそうに笑ってるのに！！」

「アハハハッ！！」

うつ嬉しくなんかいいよー！！

ハハハハッ！！」

「ほら、めっちゃ笑ってるじゃん！！」

博和のくすぐる手は止まらない…。

「ギャハハハッ！！」

もっもう無理ー！！」

ガッシャーン！！

啓人はあまりのくすぐったさに椅子から転げ落ちた。

「啓人大丈夫か!？」

健太があわてて言った。

「イテテテ…」

「あゝあ!!」

せつかくいいところだったのに…。

啓人逃げるなよ!!」

「何がいいところだよ!!」

ものすごくくすぐったかったんだから!!」

啓人はそう言うときとゆっくりと立ち上がった。

「もう!!」

反省文書かないといけないんだからジャマしないでよ!!」

「ああ…そうだな…。

博和、ここにいたら啓人のジャマになるし、向こうに…」

「おい、健太！！」

お前、啓人押さえてろ！！」

「えっ！？」

突然博和が言い出した。

「ちよっ…」

いきなり何言ってんだよ！！」

「だって普通にくすぐっても啓人逃げるだろ？」

だったら逃げられないように床に押さえつけられればいいじゃん！！」

博和は嬉しそうに言った。

どうやら先ほどのことで啓人をくすぐる楽しさを覚えてしまったようだ。

「お前だって啓人の笑った顔もつと見たいだろ？」

「えっ…」

ゴクッ…

健太は内心ドキドキしていた。

啓人の笑った顔はよく見るがあそこまでゲラゲラと笑った顔はなかなか見ない。

「うん…面白そうだね…」

健太のメガネがきらりと光る…。

「えっ…」

ちよつと…二人とも…」

啓人はニヤニヤ笑って近づいてくる2人に不安になって後ずさりする…。

「ごめんっ！！啓人！！」

グイッ！！

「うわっ！！」

健太に腕を引っ張られ、啓人はバランスを崩し倒れた。

その上に博和が軽く乗った。

「ちょっと何するの!？」

啓人がじたばたと暴れると…

「おい、健太!!」

啓人の手首押さえる!!」

「了解!!」

ガシッ!!

健太は暴れる啓人の両手首をガッシリとつかんで床に押さえつけた。

「さあ、啓人…

これでもう逃げられないぜ…(ニヤリ)」

「うっう…」

啓人の目から再び涙があふれ出そうになる…。

「何泣きそうになってんだよ!？」

これからいっぱい笑わせてやるっていうのに!！」

「イヤだよー!!放してよー!!」

啓人は逃げようとするが博和には腰の上に乗られ、健太には両手首をしっかりと押さえつけられているため動けない。

「お前が嘘なんてつくからいけないんだぜ!!
そうだな…

さっきは腹だったから今度はここだな!!」

そう言っていると博和は啓人の脇をくすぐり出した。

「アッハハハハハハ!!」

くすぐった〜い!!

やめてやめて!!

ハハハハ!!」

啓人は唯一動かせる足をじたばたさせながら大声で笑った。

「どうだ？ 啓人？」

嬉しいだろ？

「こちよこちよこちよこちよ……」

「ギャハハハッ！！」

「ごっごめんなさい！！」

「嘘ついた僕が悪かったから許してよ！！」

啓人は目に涙をためて笑いながら必死に博和たちをお願いする。

「本当か？」

「アハハハハハッ！！」

「ほっ本当だよ！！」

「ハハハハハ！！」

「うーん……」

「どうしようかなあ？」

「お願いだつて！！」

「ワハハハ！！」

「そうだ！！」

啓人、お前この間レアカードゲットしたって言ってたよな？」

博和のくすぐる手が速くなる。

「アッハハハハハ〜!!」

「あれ俺も欲しいんだけどなあ…」

「アハハハッ!! わっわかった!!

あげるっ!! あげるっ!!

だからやめて〜!! フハハハハ〜!!」

「本当か!?! よしっ…」

博和のくすぐる手が止まった。

「ハア…ハア…」

啓人は乱れた呼吸を必死に整える。

「啓人大丈夫か?」

さすがにくったりしている啓人を心配して健太が言った。

「も…もっやだ…」

啓人はついに泣き出してしまった。

「なんだよ!!」

お前泣いてんのか？」

「うっうっ…」

啓人の涙は止まらない。

「わっ悪かったよ!!」

俺もやり過ぎた…だから泣くなよ!!」

博和が泣きじゃくっている啓人に必死謝っていると…

ガラッ!!

誰かが教室に入ってきた。

「かつ加藤!？」

「みんな何してるの?」

黄緑色のワンピースを着た少女、加藤樹莉がやってきた。

「加藤こそどうしたんだよ？」

「ちょっと忘れ物しちゃって…。」

それより啓人君の上に乗っかって何してるの？」

「うっ…加藤さん…」

「啓人君…泣いてるの？」

「ああ…ちょっと啓人くすぐって遊んでただけど泣いちゃってさ…」

「あっあの…」

啓人は、思いを寄せている相手に泣いてる姿を見られ、恥ずかしくて頬を赤くした。

すると…

「ふーん…」

それでもう終わりなの？」

「えっ！？何が？」

「啓人君をくすぐるの!!（にこっ）」

「「「えっ!?!」」」

3人はにっこり笑いながら言う樹莉の言葉に目を点にした。

「僕も啓人君をくすぐりたいワンツ!」

樹莉はいつもの犬のマペット取り出して言った。

「か…加藤さん…?」

「なるほど…」

健太君が啓人君の腕を押さえて、博和君がくすぐってるのかあ…」

「あ…あの…加藤さん…?」

樹莉は啓人の問いかけを無視して、啓人の足の方にしゃがみこんだ。

「じゃあ僕は啓人君の足の裏をくすぐるワンツ!」

「えっ!?!ちよつと!?!」

樹莉はそう言つとそつと啓人の片方の上履きを脱がした。

「私も啓人君の笑つた顔が見たいから…」

「えっ…」

樹莉のその言葉に啓人は一瞬ドキツとしたがそれはすぐに笑いへと変えられる…。

「啓人君…」

「いっぱい笑つてね…」

「あの…加藤さ…アハハハハハ!!」

「こちよこちよこちよこちよ…」

樹莉が啓人の片方の足の裏をくすぐり出した。

「まっ待つて!!」

「ワハハハハ!!アハハハハハ!!」

「うふふ…」

「啓人君つてばかわいい…」

樹莉は明らかに啓人をくすぐることを楽しんでいた。

そんな様子を博和と健太が呆然と見ていると…

「何してるの？」

博和君もちやんと啓人君くすぐってよ！！

啓人君にもっと笑ってもらおう！！（にこっ）」

樹莉はにっこりと微笑みながら言った。

もつともその微笑みは博和たちにとっては悪魔の笑いにしか見えな
いのだが…。

「わっわかった！！啓人ごめんなっ！！」

樹莉の微笑みが怖かったのか博和はあわてて啓人をくすぐり始めた。

「アハハハハハ！！」

えっ！？ちよっ…ヒヤハハハハ！！

こっこんなの無理だよー！！

イヤッハハハハハ！！」

樹莉と博和にくすぐられ、啓人のくすぐったさは倍増した。

「そうそう!!」

啓人君ももっともって笑って!!」

「ギャハハハッ!!」

だっ誰か助けて!!」

啓人の笑い声は廊下にまで響いた。

その後、担任の浅沼先生に見つかって怒られたとか…。

くギルモンホームく

「ギルモン!!」

帰り道、啓人が赤い恐竜のようなデジモン、ギルモンのいる行くと…

「あっ!!タカト!!」

おかえり〜!!」

ギルモンが啓人のもとに寄ってきた。

「今日は遅かったんだね!!」

「うん…いろいろあってね…」

「ジエンから聞いたよ〜!!」

タカトまた授業中落書きして怒られたから反省文書かされてるって
〜!!」

「テリアモン!!」

長い耳が特徴のデジモン、テリアモンがひょっこり現れた。

「あれ？李君は？」

「ジエンは用事があるって出かけちゃったよ〜!!」

僕はギルモンと遊びたかったからここに残ったけどね〜!!」

「そうなんだあ…ハア〜…」

啓人は崩れるようにその場に座り込んだ。

「タカトどうしたの？」

「なんかしんどそうだよ？」

「ありがとう…ギルモン…」

「ちょっといろいろあつて疲れちゃって…」

「いろいろってどんなこと？」

「テリアモンが興味深そうに聞いてきた。」

「えっ…どんなことって…」

「クラスの友達に押さえつけられて思いっきりくすぐられたんだよ…」

「ふーん…」

「確かにタカトってくすぐったがりそうだもんねー!!」

「ま…まあそうだけど…」

「ねえねえ!!」

「くすぐったがりってどういう意味？」

「ギルモンが不思議そうに聞いてきた。」

「ギルモン知らないの？」

「ギルモン分かんない!!」

「じゃあ実践してあげるゝ!!」

ピョンッ!!

そう言うのとテリアモンは啓人の頭の上飛び乗った。

「えっ!?!テリアモン!?!」

「ギルモーン!!」

これがくすぐりだよゝ!!」

ソワソワ…

テリアモンは長い耳で啓人の首をくすぐった。

「くふふふ…」

ちよっちよつとテリアモン!!

くすぐったいつて!!」

「うーん…」

よく分かんないよゝ!!」

「そっか…」

じゃあもつと激しくしようか!!」

ソワソワソワッ!!

テリアモンの耳の動きが激しくなる…。

「アハハハハハ!!
テッテリアモン!! やめて〜!!
ハハハハ〜!!」

啓人はテリアモンを頭の上から離そうとするが、くすぐられているため力が入らない。

「なんかよく分かんないけどタカト楽しそう〜!!
ギルモンもタカトくすぐる〜!!」

「えっ!?! ちょっとギルモン!?!」

ソワソワッ!!

ギルモンは啓人に抱きつくようにしてくすぐり始めた。

「ワハハハハハッ!!
ギルモン!! テリアモン!!

やめろっ!!」

「こちょこちょこちょこちょ……」

「テリアモンそれなっに?」

「くすぐる時はねっ!!」

こっやってこちょこちょって言いながらやるんだよう!!」

「そうなんだあ!!」

じゃあギルモンも言うっ!!」

こちょこちょこちょこちょ……」

「ギャハハハッ!!ムリムリっ!!」

「タカト、モウマンタン!!」

こちょこちょこちょこちょ……」

「フハハハっ!!」

モウマンタンじゃないよっ!!」

ハハハハっ!!」

啓人が大声で笑っていると…

「ちょこーん!!ちょこーん!!」

白くてフワフワしたデジモンが現れた。

「あつ！！クルモンだっ！！」

「クル？」

みんな何してるんでっすか？」

「今ね、テリアモンと一緒にタカトくすぐってたの！！
楽しいよっ！！」

「ワハハハハハっ！！
全然楽しくないよっ！！」

「クルルっ！！
確かにみんな楽しそうクルっ！！
よーし！！
クルモンもタカトくすぐるクルっ！！
こちよこちよこちよこちよ…」

「ウワツハハハッ！！
ちよっちよっとなんな本当にやめてっ！！
ギャハハハっ！！」

再びタカトの笑い声はギルモンホームからそこら中に響いた。

「大声で騒いでるから何かと思ったら…」

「楽しそうだな…」

少し離れた木の影で髪を一つにまとめた少女、牧野留姫とキツネのようなデジモン、レナモンがこっそりギルモンホームの様子を覗いていた。

『ギャハハハ〜！！たっ助けて〜！！』

啓人のすさまじい笑い声が聞こえてくる…。

「ルキ、助けてあげないのか？」

「あんなのただじゃれ合ってるだけじゃない！！
馬鹿馬鹿しい…」

と言いつつもどこか嬉しそうに中の様子を覗く留姫…。

すると…

「ルキ、レナモン！！」

そんなところで何やってるんだい？」

オレンジ色のベストを着た少年、李健良がやってきた。

「何って…バカの見物…」

「？」

留姫の言葉に健良は首をかしげた。

「こちょこちょこちょこちょ…」

「こちょこちょこちょこちょ…」

「こちょこちょクル…！」

「アッハハハハハ…！！もっもうダメ…！！
ヒヤハハハハハ…！！」

その後、デジモンたちが飽きるまで啓人はくすぐられたのであった。

くすぐり（後書き）

ただ啓人をくすぐっていじめたかっただけという…

いきなりこんな話ですみません m (——) m

次はちゃんとした話を書けるように頑張ります（笑）

虹（前書き）

最終回後のお話です。

タカジュリでほのぼののつもり（笑）

虹

「あーあ…」

やっぱり降ってきちゃった…」

黄緑色のワンピースを着た少女はザーザーと降っている雨を眺めながら呆然と昇降口に立ちすくんでいた。

「こんな日に傘忘れるなんて最悪…」

樹莉が愚痴をこぼしていると…

「あれ？加藤さん…？」

「啓人君？」

薄い茶色髪の少年が声をかけてきた。

「こんな遅くにどうしたの？」

「ちよつと係の仕事してたら遅くなっちゃって…。
啓人君は？」

「えっ…えーと僕は…」

啓人はあわてて視線をそらした。

「もしかしてまた反省文…?」

「ドキッ!」

「凶星?」

「そ…そうです…」

「うふふ…啓人は相変わらずだワンッ!」

樹莉は犬のマペットで啓人をからかうように言った。

「あはは…」

ところでさ、加藤さんは今から帰るところ?」

「うん…」

でももうちょっとここで待ってるかな…」

「えっ!?何で!?」

「傘忘れちゃって…」

だからもう少しおさまるまで待とうかなって…」

「そうなんだ…。」

あっ！！そうだった！！」

「啓人君？」

啓人はランドセルの中をぐそぐそし出した。

「はいっ！！」

「えっ！？」

啓人はにこつと笑うと一本の折りたたみ傘を樹莉に差し出した。

「僕の傘貸してあげるよ！！」

朝、お母さんに言われてあわてて持ってきたんだ！！」

「えっ…でも…」

啓人君、他に傘あるの？」

「ううん。これだけ。」

「そっそんな！！」

それじゃあ啓人君が濡れちゃうじゃない！！」

「僕は平気だよ！！走って帰るし！！」

それより加藤さんが雨に濡れて風邪でもひいたら大変だしね!!」

啓人は笑顔で言った。

「啓人君…」

「それじゃあ!!」

啓人が昇降口から外に出ようとしたその時…

ギュッ!!

「えっ!?!」

樹莉が啓人の袖をつかんでいた。

「加藤さん…?」

「そんなのダメよ…」。

それじゃあ啓人君が雨に濡れて風邪ひいちゃうじゃない…」

「だっ大丈夫だよ!!」

僕のことなんて気にしないで!!」

「気にするよ！！だって…だって…」

樹莉の声がだんだんと小さくなっていく…。

「加藤さん…？」

「一緒に傘に入ろう…」

「えっ…」

樹莉の言葉に啓人の顔が一気に赤くなる。

「このまま待つても止みそうにないし…。
私はそれでもいいけど…啓人君は嫌…？」

「いつ嫌じゃないよっ！！
ただ…ちよつとビックリしただけ…」

「良かったあ…じゃあ帰ろう…」

傘を開いて中に入ると2人はそのまま歩きだした。

「……………」

「……………」

沈黙が続く…。

こっこれって相合傘だよね…

い…いいのかなあ…

啓人は好きな人との相合傘にすぐドキドキしていた。

すると…

「ごめんね…なんか強引なことしちゃって…」

沈黙を破って樹莉が言った。

「あっうっん！！」

僕の方こそごめんね！！

こんなときに折りたたみ傘で…普通の傘持って来たらよかったよ…」

折りたたみ傘なので2人で入るには小さく、お互いの肩は雨で濡れていった。

「私っていつも迷惑ばかりかけてるよね…」

「えっ…」

「デジタルワールドでもそうだったし、デリーパーのときだって…」

「加藤さん…」

「今日だって啓人君に迷惑かけちゃって…」

「迷惑なんかじゃないよっ！…！」

啓人は大声であげて言った。

「ぼ…僕は…」

こうして加藤さんと帰れて…嬉しいよ…」

啓人は頬を赤くして恥ずかしそうに言った。

「啓人君…」

「あつ…あの…だから…」

啓人が顔を真つ赤にしていると…

ポツポツ…

さっきまでザーザーと降っていた雨が止んでいった。

「あつ…雨…止んだね…」

「ホントだね!!」

あつ!!見てよ、加藤さん!!
ほら虹だよ!!」

雨が上がった空には大きな虹ができていた。

「綺麗だね!!」

啓人が虹を見てはしゃいでいると…

「私…虹って嫌い…」

「えっ…」

樹莉は折りたたみ傘をたたみながらボソツと呟いた。

「どうしてっ!？」

こんなに綺麗なのに!！」

「だって…思い出すから…」

「思い出す…?」

「彼は…レオモンは…虹の中から現れたの…」

樹莉はゆっくりと口を動かす…。

「レオモンが…?」

「うん…私今でも思うの…」

どうして私なんかレオモンのティマーになったのかなって…」

「えっ…」

「だって私がレオモンのティマーになんてならなかったら…きっとレオモンはあんなことにはならなかった…」

「加藤さん…」

「ティマーとしてレオモンに何もしてあげられなかった…。私って本当に邪魔者…」

「やめてよっ！！」

啓人は大声をあげた。

「そんな風に自分を責めたりしないでよ…」

「啓人君…」

「確かにレオモンはもういない…」

「……………」

「だけどレオモンとの思い出は加藤さんの心の中に残ってるはずだよ…」

「心の中に…?」

「うん…。」

加藤さんがレオモンとの思い出を大事にしている限り、レオモンは加藤さんの中で生き続けるよ…。」

啓人は優しく微笑みながら言った。

「啓人君…」

「僕だって、時々思うんだ…あの時の出来事は本当だったのかなって…。」

ギルモンと出会っているんことがあって、辛いこともあった。でもどんなことだって一緒に乗り越えてきた。

だから今まで当たり前のように一緒にいたギルモンがいなくなつて夢から覚めたつていうか…現実に戻されて毎日が憂うつつていうか…」

「……………」

樹莉は黙つて啓人の方を見ていた。

「でも時々ギルモンとの日々を忘れそうになるんだ…。」

だからそんな自分が恐くて必死になつてノートにギルモンとの思い出を描いたりして…。

あつ…でもそれで反省文書かされてたりしてるんだけどね!!」

啓人はえへつと笑いながら頭をかいた。

「そうなんだ…ごめんね…」

そんなことも知らないでからかったりして…」

「うつん!!」

授業中に落書きしてる僕が悪いんだし…。
あっそうだった!!」

啓人はそう言っていると樹莉の腕をつかむとそのまま走り出した。

「啓人君!？」

「いいからついて来て!!」

啓人はにこつと笑顔で言った。

しばらくして…

「うわぁー!!」

ここから見える虹も綺麗だね!!」

2人はとある場所に来ていた。

「にこつて…」

「うん…僕らがよくギルモンたちと遊んだ公園…」。

そして、加藤さんとレオモンと出会った場所…」

「レオモン…」

「僕、ギルモンのおかげでいろいろ変わった気がするんだ…。

泣き虫で弱虫でどうしようもない僕にギルモンは勇気をくれた。

だからギルモンとの思い出を大事にしようと思うんだ。

大人になっても絶対に忘れないように…」

「啓人君…」

「だから加藤さんもレオモンとの出会いを忘れようとしたりしないでよ。

きっと加藤さんのそんな姿見たらレオモンも悲しむと思うよ…」

「レオモンが悲しむ…?」

「うん。」

レオモンはきつと加藤さんの笑顔が見たいはずだよ…!

あつ…それは僕もだけどね…!」

啓人は恥ずかしそうに言った。

「啓人君…ありがとう…」

「加藤さん…?」

「私大事なことを忘れようとしてた…。

レオモンと過ごした日々は私の宝物なのに…」

「大丈夫!!」

今からでも大事にして!!レオモンとの思い出をさっ!!」

啓人はにっこり笑いながら言った。

「うんっ!!」

樹莉も笑顔で返した。

「ねえ…啓人君…」

「何?」

「家まで送ってほしいワンッ!!」

樹莉は犬のマペットを取り出して言った。

「いいよ!!」

「ありがとう!!…あと…」

「ん?」

「手繋いで欲しいな…」

樹莉は頬を赤くして甘えるように言った。

「えっ…」

啓人の頬も赤くなる…。

「ダメ…?」

「うっうん…繋ごう…」

ギュッ…

啓人はそつと樹莉の手を握りしめた。

2人はそのままゆっくりと歩きだした。

七色に光る虹を見上げながら…。

君の大切さ？（前書き）

今回はジェンとテリアモンが中心です（＾－＾）

ジェン×テリアモン＋タカトって感じ。

君の大切さ？

「ねえ…どうしてもダメ？」

「どうしてもダメ!!」

朝、長い耳が特徴的なデジモン、テリアモンがオレンジのベストを着た少年にお願いの眼差しで見る。

「今日は日直でいろいろ忙しくて君にかまってやれないんだよ…」

「大人しくしてるからさ!!」

すると…

ガチャッ!!

「あっ!! テリアモン見つけたっ!!」

「ゲッ!!」

健良の妹、小春がやってくるとテリアモンはあわててぬいぐるみのふりをする。

「ジェン兄ちゃん!!」

今日はテリアモン学校連れて行かないんだよね？」

「あ…ああ…」

「やった〜!!」

じゃあ今日はあたしがちゃんと面倒見てあげるからねテリアモン！
」！

につこり笑うと小春はテリアモンを連れて出て行ってしまった。

「ごめんな…テリアモン…」

「はいっ!!」

じゃあ今日はあたしがテリアモンを可愛くお着替えしてあげましょ
う!!」

小春はひらひらの人形用のワンピースを取り出して笑顔で言った。

また変な遊びを…

テリアモンがそんなことを思っているとも知らずに…。

「じゃあ私が着せてあげるからね!!」

小春がテリアモンにワンピースを着せていくが…

「あれ？入らない…」

人形用のワンピースはテリアモンには小さかったらしく腕が通らない…。

「まあいいかつ!!
無理やり入れちゃえ!!」

グイッ!!

「!!」

小春はワンピースの袖を無理やりテリアモンの腕に通した。

痛い！！痛いよ！！！！

テリアモンは心の中でそう叫んだ。

「うわあ〜！！」

テリアモンつてばスツゴく可愛くなつた〜！！
さっすがあたしの選んだ服♪♪」

いいから早く脱がして〜！！

テリアモンが再び心の中で訴えていると…

『小春、お買い物に行こうか？』

健良の母親の天使の言葉が聞こえてきた。

「ハーイ！！」

テリアモンちょっと待っててね！！」

た…助かった…

テリアモンがそう思っていると…

「あっ！！帰って来たらまた遊ぼうね！！
今度はおままごと！！」

私がお母さんでテリアモンは子どもだから！！」

ゲッ！！

テリアモンは一瞬顔色を変えたが小春は気がつかずに行ってしまった。

「ハア…せめて脱がしていつてほしいなあ…
腕ちぎれるかと思ったよ…」

テリアモンはそう呟きながらワンピースを脱いだ。

「ジェン…どうしてるのかな…」

テリアモンは窓の外を眺めながら呟いた。

その後、小春が帰ってくると再びテリアモンの地獄が始まった…。

～夜～

「ただいま!!」

健良が帰ってくると…

「ほらテリアモン!!高い高い!!」

テリアモンは小春に遊ばれていた。

「あつ!!ジエン兄ちゃんお帰りなさい!!」

「あ…あ…ただいま…」

「テリアモン今日はいい子だったよ!!
ほら可愛くなったでしょ!!」

バツと健良の目の前に差し出されたテリアモンは、こてこての服に、アクセサリーや髪飾りがたくさんつけられて見るもむざんな姿にされていた。

「あ…ああ…そうだな…」

健良の顔が引きつる…。

く健良の部屋く

「いつもごめんな…テリアモン…」

健良がベッドで仰向けになっているテリアモンに謝る。

「モウマントイ…僕なら大丈夫…」

と言いつつもテリアモンはフラフラである。

『健良く…！…ご飯よ…！…！』

「はい!!」

じゃあテリアモンまた後でな…」

「モウマンタイ…」

健良は部屋から出ていった。

「ハア… 僕いつまでこうしてなきゃいけないんだろ…」

テリアモンはふと呟く…。

もう一生…

小春のオモチャとして過ごさないといけないのかなあ…

テリアモンの頭に嫌な考えがよぎる…。

「そんなのイヤだ…!!」

僕はデジモンとして生きていきたいよ…!!」

ガチャッ!!

「何の声!？」

しまったっ!!

つい感情的になり叫んでしまったテリアモンの声に驚いて健良の姉がやってきた。

すると…

「どうしたの!?!お姉さん!？」

その声に驚き、健良もやってきた。

「今なんか変な声が聞こえたのよ…」

「へ…変な声？」

き…気のせいだよ…きっと…」

再び健良の顔が引きつる…。

「そうかな…」

「きつと疲れてるんだよ!!」

あっ!!それよりご飯できてるよ!!」

健良はあわててごまかす。

「そ…そうね!!わかったわ!!」

そう言うとき健良の姉はリビングの方へ行った。

「ハア…なんとかごまかせたな…」

「ジェン…ごめん…」

テリアモンがしょんぼりして謝る。

「気をつけてくれよ!!」

誰がどこで聞いているかわかんないんだから…」

「ねえ…僕…いつまでぬいぐるみのふりしないとダメなの?」

「えっ…それは…」

「小春にあゝんなことやこんなことされて…」

「それは悪いと思ってるよ…でも…」

「本当にそう思ってる？」

「えっ…」

テリアモンの問いかけに健良は言葉が出ない。

「どうしてそんなこと聞くんのだ？」

「だって…最近…」

ジエン僕に冷たいじゃない…」

「！！」

「僕だって自由に生きたいよー！」

「テリアモンッ！！」

ビクッ！！

健良の怒鳴り声にテリアモンはビビる。

「分かってくれよ…」

そもそも僕たちの世界に君たちデジモンは存在してはならないんだ…」

「ジェンは僕の存在を否定するんだね…」

「テリアモン…」

テリアモンはそのままそっぽ向いて口を聞かなくなってしまった。

ガチャッ!!

「健良ご飯食べないの？」

健良の母親がやってきた。

「あ…ああ…行くよ…」

健良は静かに部屋から出ていった。

ジェンにとって僕はなんなのさ…

テリアモンの目からは涙の雫がこぼれ落ちていた。

「次の日」

「……………」

「フンッ…」

「あ…あの…」

朝、啓人は健良とテリアモンに会って一緒に登校していたが何やら2人の様子がおかしい…。

「ね…ねえ…なんかあったの…?」

啓人はおそろおそろ聞いてみるが…

「別に何でもないよ…」

「モウマンタイ…」

2人は固く口を閉じたまま。

「そついえば李君がテリアモンを連れてくるの久しぶりだよね!!」

啓人は頑張つて話しかける。

「ああ…最近日直や係の仕事とかで忙しかったからね…」

「その間僕はずっと小春のオモチャだったけどね!!」

テリアモンが嫌味つたらしく言う。

「だから悪いと思つてゐるって言つてゐるじゃないか!!」

「そう言つてゐるけど、ジエンはいつもあれはダメっ!!これはダメって僕がすること何でもダメって!!」

僕はどこでストレス発散すればいいのさ!!」

「人には散々モウマンタイって言っておきながら自分には言えないのか?」

「何それ!!」

「ちよつちよつと李君もテリアモンも落ち着いて!!」

啓人があわてて止めるが…

「僕もうウンザリだよ!!」

「ああ!!僕もだよ!!」

2人の言い争いは終わらない。

すると…

ピョンッ!!

「えっ!?!」

テリアモンは健良の頭から啓人の頭に飛び移った。

「僕今日はタカトのどこいる!!」

「ええ〜!?!」

「ああ!!勝手にすればいいさっ!!」

「ちよつちよつと李君!!」

「言われなくても勝手にするよ!!」

自分のパートナーデジモンとちゃんと付き合えないなんてデジモン
ティマー失格だよ!!」

「!!」

「テリアモンもやめなよ!!」

「啓人君…ワガママなやつだけどよろしく…」

健良はそう言つと黙つて走りだした。

「ちよつと李君!!」

「タカト!! あんなやつほつといて早く学校行こつよ!!」

「ねえテリアモン…何があつたの？」

「モウマンタイ!!」

「あはは…」

モウマンタイの一点張りで口を開かないテリアモンに啓人は苦笑するしかなかった。

君の大切さ？（後書き）

短いかなと思ってましたがかなり長くなりそうです（；・；）

たぶんまだまだ続きます！！

良かったら感想ください♪

君の大切さ？（前書き）

前回の続きです!!

ですが今回ジェンは出てきません（；、）、（

この話は博和たちがまだギルモンの存在を知らない時の話になるんでしょうか…

君の大切さ？

『啓人君！！』

「加藤さん！！」

黄緑色のワンピースをきた少女が声をかけてきた。

「おはよう！！あれ？それ…」

樹莉は啓人の頭の上に乗っているテリアモンを指差した。

「あっこれは…」

「かわいい〜！！」

でもそれっていつも隣のクラスの子が連れてるぬいぐるみだね？」

「えっ…そ…そうなんだ！！」

実は僕も一度学校に連れてきてみたいなあって思ってたんだ！

！あはは！！！！」

啓人は苦しい言い訳をする。

「へえゝそうなんだ!!」
でも大丈夫？浅沼先生に見つかったらまたいろいろ言われるかもよ
!!」

樹莉はそれを真に受ける。

「とつとりあえず頑張つてごまかすよ!!」

ゝ5年2組教室ゝ

「へえゝ!!」
テリアモンじゃん!!」

「うん!!」

啓人は膝にぬいぐるみのふりをしているテリアモンを乗せて椅子に座っていた。

その様子をクラスメイトの博和と健太が物珍しそうに見ている。

「しかしこのぬいぐるみよくできてるなゝ!!」

博和がテリアモンの耳をいじりながら言った。

「でもこのテリアモンっていつも隣のクラスの奴が連れてるよな？
なんで啓人が持ってたんの？」

健太が不思議そうに聞いてきた。

「えっ…えーと…李君に借りたんだ!!」

「借りた？何で？」

「だってほらテリアモンってかわいいし、癒されるかなって…思っ
て…」

啓人は冷や汗をかきながら答えた。

「なあ…啓人…」

前から聞こうと思ってたんだけど、何でお前あの李って奴と仲良く
してんの？」

「えっ…」

博和の問いかけに啓人の言葉が詰まる。

「だってアイツいつつも難しい顔して一人でいるし、なんか近寄り
がたいっていうかさ…」

「そんなことないよ!!」

李君は優しくてすごく頼りになるんだよ!!

何にも知らなかった僕にいろんなこと教えてくれたし…」

啓人は笑顔で言った。

「ふーん…そっか!!」

ハッ!!

そうだよ…ジエンは…

いつも僕のこと気遣ってくれて…

笑ってくれて…

って僕何考えてんの!!

テリアモンは頭をブンブンと振った。

「ん？今このぬいぐるみ動かなかったか？」

「へっ！？なっ何言ってるの！？」

「そそそんなわけないじゃん！！あはは……」

啓人は笑ってごまかす。

「だ……だよな……」

「それにしても何でその李って奴いつもテリアモンのぬいぐるみなんか学校に連れてきてるんだ？」

「さ……さあ……何でかなあ……」

すると……

ガラッ！！

「まずいつ！！おい啓人！！

浅沼先生来たぞ！！」

「早くそのぬいぐるみ隠さないといっ！！」

「うつうん!!」

ギュー!!

啓人はテリアモンをあわててランドセルに押し込めた。

「そこ何やってんの!!」

啓人たちを不審に思った浅沼先生がやってきた。

「あっ… なっ何でもないです!!」

「ちょっと啓人君…それは何？」

「えっ!？」

啓人があわててランドセルを見るとランドセルの端っからテリアモンの長い耳が出ていた。

「えっと…これは…マフラーです!!」

今日ちよっと寒かったので…」

「マフラーの季節はもうとくに終わったと思うけど?」

「えっ…え」と…」

「ハア…啓人君…また変なもの持ってきて…
どうしてあなたはそう次々問題を起こすの!!
大変なのは私なのよ!!」

もうこれ以上私の仕事を増やさないで!!」

「ごめんなさい…」

その後啓人はこっぺり怒られ、反省文を提出したのだった。

…帰り道…

「ねえ…!!」

もうちょっと優しく扱ってよ…!!

ランドセルに無理矢理詰められて痛かったんだから…!!」

啓人の頭の上に乗りながらテリアモンが言った。

「あのねっ!!」

君が勝手についてきたんでしょ!!

おかげで先生に怒られて、反省文まで書かされたんだよ!!」

「ああゝあの先生ねゝ!!」

やる気ないんじゃない?

自分のことしか考えてないみたいだし!!」

「ま…まあそうかもしれないけど…」

「タカトも大変だね!! モゝマンタゝイゝゝ」

「もう!!」

呑気そうに言うテリアモンに啓人は呆れていた。

すると…

『ちよつと!!』

「留姫!!」

髪を一つにくくっている少女が啓人に話しかけてきた。

「なんでアンタがソイツと一緒にいるの!!」

「えっ…これは…その…」

「もうソイツなんてひどいなあ!!」

「実はさ…」

啓人は近くの公園のベンチに座って留姫に今までのことを話すことにした。

「ふーん…」

要するにケンカしたのね!!」

「うん…」

それでテリアモンは僕のところにきて…」

「そういうこと…」

「でもなんでよりによってコイツなわけ!?!
こんな泣き虫ティマーなんかよりアンタのパートナーの方がしつかりしてるじゃない!!」

留姫は啓人を指差しながら言った。

「な…泣き虫ティマーって…」

「確かにジェンは優しいし、すごくしつかりしてる。」

でも…今のジェンとは一緒にいたくない…」

「なんで？」

「だって僕に冷たいから…」

今はジェンより、泣き虫で頼りないけどタカトと一緒にいる方がいい…」

「テリアモンまで…」

啓人が落ち込んでいると…

スッ…

『ルキ…』

「レナモン!!」

キツネのようなデジモンが姿を現した。

「今の聞いてた？」

「ああ…」

「レナモンはどう思うっ？」

「私はパートナーにはそれぞれの形があると思う。
しかし時には離れることで気づくこともあるだろう…」

「離れることで気づくこと？」

「ああ…それに気づけばまた関係も変わってくるだろう…」

「ふーん…」

なんかよく分かんないけど確かにお互いを考えるには機会なんじゃない…」

「いい機会って…ちょっと留姫!…」

「まあ…アンタは大変だと思うけど…ちゃんと面倒見てあげなさいよ!…」

「ええ〜!?!」

「うん!…」

僕タカトの頭の上も気に入った〜!!
モ〜マンタ〜イ!」

「テリアモン…」

「別にいいじゃない…小型だし…
それに…ソイツ頭に乗せてるアンタもいいと思う…」

「えっ…」

留姫は頬を赤くしてボソツと言った。

「じゃあアタシ帰るから!!
行くよ、レナモン!!」

留姫とレナモンはそのままその場をあとにした。

「テリアモンを乗せた僕もいってどっという意味なんだろう…?」

「さあ?」

でもきつと誉め言葉だよ!!

モ〜マ〜ンタ〜イッ!」

啓人は留姫の言葉にただ頭にハテナマークが浮かべるばかりだった。

君の大切さ？（後書き）

まだ続きます…。

最後の留姫の言葉は私も謎です…

なんとなくタカルキっぽくしたかっただけという…（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0923x/>

ティマーズの日々

2011年10月16日02時00分発行